



共同研究「“日常茶飯”—日本人は何を食べてきたか—」

主催：神奈川大学日本常民文化研究所
第9回 公開研究会

昆布と東アジア

—アイヌ・日本列島・琉球・中国を結ぶ交易と食文化—

松尾恒一 氏（国立歴史民俗博物館 教授）

日時：2026年10月30日（金）13：30～15：10

【開催形式】

対 面：横浜キャンパス9号館12室

オンライン：Zoomミーティング（開場：13:15）

※対面にて参加の場合は申込不要

オンライン参加 申込フォーム

IDとパスコードが
自動返信メールに
て送信されます。



図版上：『蝦夷蝦夷国風図絵』江戸時代、アイヌ女性の昆布漁業の様子。函館市中央図書館所蔵

写真下左：愛媛県漁業組合宇和島支所 広沢初志氏提供、養殖昆布の収穫

写真下右：函館鹿部での昆布養殖、鹿部温泉観光協会提供

発表要旨

昆布は、日本料理を代表する食材である。日常食としてだけでなく、正月料理・精進料理などの行事食に広く利用され、和食においては、煮干し（イワシ）・鰹節・鶏などとともに出汁（だし）として重要な役割を果たしてきた。

しかしながら、その歴史をたどると、昆布は「日本固有の食文化」とはいいがたい。北方の先住民族であるアイヌ居住域から日本列島全域を経て、琉球群島・中国大陆に至る広域な海域交流のなかで流通した国際的商品であった側面が浮かび上がってくる。

北海道沿岸で採取される昆布は、古代以来、朝廷への献上品として畿内にまで運ばれ、中世には北方交易を通じて流通した。近世には松前藩による蝦夷地支配と北前船による交易を通じて日本全国の市場が形成され、そのネットワークの延長上、薩摩藩を經由して琉球・中国へ輸出された。さらに、近代には函館の開港により華僑や三井物産などによって東アジア市場へ大量輸出され、中国・台湾・東南アジアの食文化にも影響を与えていった。

このように、昆布の歴史は、日本列島内部だけで完結するものではない。日本列島の北南の海洋を超え、北方の先住民社会・琉球群島・中国大陆を結ぶ海域交流史のなかで理解できるのである。

本発表では、昆布をめぐる歴史を「アイヌー日本ー琉球ー中国」を結ぶ東アジア海域交流の視点から、食文化としての側面にとどまらず、その社会・経済的な役割を考察する。